

隨想

たくましく働く子ら



諸橋延子

夕方の遅い訪問を気にしながら、もう一度A君の家に寄つてみると、「先生、さつきはすみませんでした」母親がにこにこと、子牛が生まれたことを話してくれた。A君の家には三十頭の乳牛がいる。飼料の準備や搾乳、子牛の世話をなど朝から晩まで生きものの世話を、文字通り「待ったなし」なのである。その大変な仕事を、父親とA君が受け持つている。母親はA君についてこう語ってくれた。A君は力持ちである。仕事もすぐ父親に追いつけるだろう。何よりも仕事に対し責任感がありられるようになった。勉強もやつてゐるし、中三になつたら急に頼もしくなってきた。と、うれしそうであつた。A君は学級でも、おとなしいが実力のあるまじめな勉強家で、何を頼む

「このごろの子供は作業がへただ。勤労意欲が乏しい」などという話を耳にすることがある。なるほど、私の学校の生徒も一般的には、あまり作業が上手とはいえない。除草作業でも、草の根を抜かず根もとからちぎりたりする。仕事が遅く、見通しをたてて時間内に処理することなどが、うまくできないようだ。まして自ら仕事を見つけたやれる生徒はいない。

以前、学級で家事手伝い調査をしたことがある。それによると、あまり手伝いをしていないことがわかつた。また手伝いをする生徒も、ごく簡単な部分を、少々受け持つていて過ぎない。まかされた仕事を最後までやりとげると、いつた機会は非常に少なく、子

供にもできる仕事を、親がやってしまふ。家庭における子供の労働分担は、非常に軽く、片寄っているのではないだろうか。

「中三になつたので勉強をやってもらいたいから、仕事は頼まないことにしました」ある母親が言つた。この時期は親の方が遠慮がちで、神経質になつてゐるようだ。「何かさせせて下さい。家庭の一員として一つぐらい責任を持たせて下さい」と私は答えた。生活に即した労作業の経験の少ない生徒達の動作は、たどたどしく不器用で、てきぱきと自主的に行動できない。除草をしながら、仕事が完了することを、ではなく終わりのベルが早くなつてくれることを願つているように見えるの

——このままでいいのだろうか。実生活に必要な仕事を体験させることの大切さを、もつともっと真剣に考えなくてはと思っていた時、A君の話を聞いた。本当にうれしかった。それに他にもまだあった。Bさん、C君のことである。Bさんは、洗たくと、朝晩の炊事をやる。預ったお金を計画的に使い弁当を作り、家族の好物も忘れずに温かい思いやりをみせて いる。C君も中一から、朝食の準備、弁当作りをまかされている。農作業もよく手伝う。仕事をしながら、次の仕事や勉強の段取りと時間の配分を考えるという。何でもないようなことだが、生活の中でこういうことこそ大切なのではないかとつくづく思うのである。

家族への思いやりや連帯感、勤労の尊さを知ること、これは決して机上で得られないことである。家庭訪問をしてみて、働く子らがたくさんいることを知った。たくましく生活できる子らを育てるためにも、Bさんの両親の言葉をかみしめ、教師として親として努力していきたいと思う日々である。

「働く子は大人になります。手伝うよう仕向けるのは親の知恵です。今は黙っていても、わかり合うようになります。しっかりと働く後姿を見せなくてはね」



体を使って楽しく